

小学校英語担当教員のための英語発音講座

English Pronunciation Trainings for Elementary School Teachers

竹 野 茂

小学校に英語活動が本格的に導入され、小学校の教育現場で英語の授業が行われている。英語活動の実態はALT(英語指導助手)任せていたり、中学校の英語教員が指導にあたり、小学校の担任自らが指導にあたりと形態は様々である。小学校での活動であるので、担任自らが英語活動の中心を担うのが本筋と言える。しかし、英語力に対する不安、発音に対する自信のなさから、小学校の教員が現場で十分に力が発揮できない状況も見受けられる。

このような状況を少しでも打開するために行った小学校教員に対する発音ワークショップをまとめてみた。英語母語話者のような発音とまではいなくても、少なくとも英語として認識されうる音声の獲得は、教員でなくても必要なスキルである。英語音声学の基本的な知識も必要であるが、まずは英語音を実地に出せるようになることが急務である。研修時間の取りにくい小学校の現場で毎日少しずつの努力で英語音声の確立を目指せる訓練を提案していく。

本稿は、筆者が以前英語音声学会において行ったワークショップの内容を中心に執筆加筆した。

キーワード：小学校英語活動、日本人教員、英語発音、発音訓練、カタカナ英語音からの脱却

目 次

- I. はじめに
- II. カタカナ英語からの脱却のための英語音声訓練（基礎訓練編）
- III. カタカナ英語からの脱却のための英語音声訓練（実践訓練編）
- IV. まとめ

I. はじめに

小学校での英語活動指導において、指導者の英語音声の確立は大きな意味を持つ。World Englishesの見地から、英語音声のある程度のローカライズ化を容認する傾向にあるが、指導者の

立場にある人間としては、英語として認識される音声を発音できることは、外国語指導の初期段階の指導者であれば特に避けられない要件である。生徒は初めて外国語に接するとき、Nativeの発音とはいかないまでもできるだけNative音に近い音声で指導されることで、外国語への興味がわいたり、異文化との接触を身近に感じたり、外国語音を外国語音として認識し始めたりするのである。外国語音声との出会いの場での指導者（教員）の力量が、生徒に大きく影響する。

しかし、特に、小学校英語活動に携わる教員は現状では英語を専門にしている教員があたるとは限らない状況にある。したがって、英語の発音に自信の持てない教員が英語を指導するということも十分に考えられる。そのような状況のもとでは、小学生という聴覚能力の高い段階で外国語を学ぶ意味は、半減してしまうと考えられる。

そこで、指導者（教員）が最低限の英語音声を確立するための訓練が必要になる。英語を専門にしていない指導者（教員）にとって、短時間での外国語音の習得は容易なことではないが、訓練内容と訓練方法を知っていれば、日々の努力によりそれなりの自信をもって英語指導に当たることができ、楽しい有意義な英語授業を展開できるのではないかと考える。

小学校英語活動の中では文字を積極的に教えないことになっているが、アルファベット26文字には英語音のほとんどの要素が凝縮されている。th音など一部の音は別途教える必要のあるものもあるが、9割以上はアルファベットの習得でまかなえる。

本稿では、特に小学校で英語指導に当たる指導者（教員）を対象に、訓練内容の一端と実際の発音訓練を行っていくと考える。

II. カタカナ英語音からの脱却のための英語音声訓練（基礎訓練編）

日本語音（カタカナ英語）と英語音とは、発声法から異なる。英語音は日本語音に比べるとかなり語気が強い。日本語を腹式呼吸で発声している日本人は存在するが、日本語や英語を発声する際に呼吸法を意識して発声している人は多くないと考える。日本人が英語を外国語として意識せずに発音する際は、数年に亘ってNative speaker並の訓練を受けた経験がない限り、発せられる音声は「日本語音」である。英語を外国語と意識し、いくつかの留意点を考慮しながら発音することにより、英語指導音としての英語音を発声できる。

（1）発声法-横隔膜呼吸、「アタック」音

強い語気を発声させるためには、横隔膜と腹筋を使った「アタック」音（図1）を持った発声法が必要である。訓練法の第1歩として、「横隔膜の後端をゆっくりと押し下げ、あたかも腰のあたりに空気を溜め込むように、1、2、3と鼻から息を吸い、4で一瞬のポーズを置き、その後一気に肺の中の空気をすべて吐き出す」訓練をする。この空気の吐き出しに様々な英語音を同期させて発声することを「アタック」音とする。この発声法は、英語の強勢（ストレス）の基本になる。

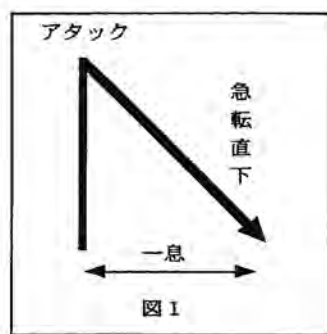


図1 「アタック」音

(2) 増幅法

「増幅法」通常音を100%としたときに、200%の音量と呼吸量で発声させることにより、英語音の子音の強さを定着させるための発声法である。この「増幅法」によって発声された音声を「増幅音」と呼ぶことにする。この「増幅音」は、訓練音として位置づけられるもので日常的に使用する音声ではないことに留意する必要がある。しかしながら、他人の前で大きな声を出すことに恥じらいを強く感じる日本人にとっては、普通の訓練では本来出さなければならない音量を出さないため、鋭い呼吸法や唇周りの筋肉、舌が鍛えられず、英語音は獲得しがたい。強制的に「増幅音」を出さなければならない訓練法であると、精神的に鍛えられ強くなるためには有効な方法である。大人の場合は特に異文化摩擦に対処する術（すべ）を訓練することにもつながる。

一方、小学生は大きな声を出すことを厭わない時期であるから、むしろ楽しく自然に大声を出し、自然に増幅法を身につける可能性が大きい。ただし、息を上手に使うことは丁寧に教える必要がある。

(3) 英語における強勢（ストレス）

英語において、強勢（ストレス）の置かれた音節の特徴は、「強く」「高く」「長く」発音されること（ストレスの3要素）である。日本の英語教育の中では、強勢（ストレス）とはどのようなものであるのかについて、実演を踏まえた正しく十分な指導がなされていないか、或いは学習者の理解が不十分なため、ストレスの3要素のうち日本語音で発声しやすい「高く」「長く」という要素がより強調され、日本語音の特徴にはあまり見られない、むしろ日本人には苦手な発声の特徴である「強く」という要素は軽視される傾向にある。また、音節全体にストレスが置かれなくて、「高く」「長く」という要素を母音にだけ適応するため、丸みを帯びた高低差（ピッチの差）が強調された「強勢（ストレス）」となってしまう。（図2参照）

その結果、英語特有の一定時間のインターバルで出現する鋭い強勢（ストレス）音と、その強勢

音間の音素の畳み込まれるような連結を再現できないことになる。これが日本語英語のメカニズムの一端である。

英語は音的にはTime-Stressed Languageの性格を持っている。一文の中にいくつかの強勢を置かれた部分があり、その強勢部分間のインターバルはほぼ一定で、強勢部分以外の音声は「畳み込むように」あるいは「刻み込むように」素早く小さく発音される。英語を学習する上ではこの言語的特徴はどうしても身につけなければならないものである。これを訓練するために、よくJazz Chantzという簡単な英語詩とリズムを組み合わせた教材が使われる。

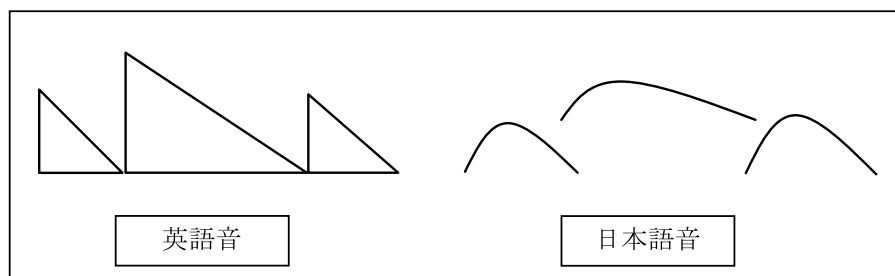


図2 英語強勢と日本語的強勢のイメージ

(4) 口形

日本人が英語を発声する際、英語子音の強さや呼吸のコントロールをするために、「メガフォン型」(図3)の口形作りが欠かせない。この口形作りを訓練することで、唇周りの筋肉を鍛え、より強い英語音声を発声する助けになる。「メガフォン型」を作るためには、唇の両端を引き締めるように唇の開きを四角になるようにつとめる。また、この「メガフォン型」の拡張として、「縦開き」(図4)もマスターする。唇の両端を引き締めることは不要に息を漏らさないことにつながる。つまり、呼吸を有効に利用することができる。

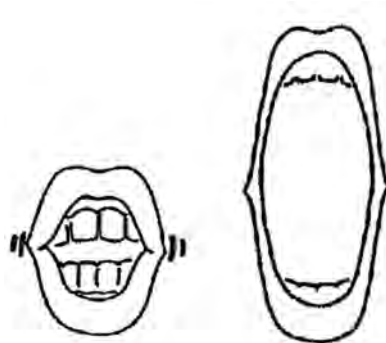


図3 「メガフォン型」 図4 「縦開き」

このメガフォン型口型と縦開き口型の連続口型移動をマスターすることが、英語における息の効果的な使い方をマスターする近道であると同時に、Time-stressed言語特有の強勢のある音を中心にした、刻むようなリズムをマスターする近道でもある。

（５）母音と子音の分離

英語音と日本語音との大きな違いは、子音と母音の重なり合いの分量が大きく異なることである。例えば、日本語の「カ」と英語のkaで比べると、「カ」は図5のように子音/k/が母音/a/とがほぼ重なり合って一体となり1つの音を構成しているが、英語音的kaは図6のように子音/k/が70%の息の分量で発声されたのち徐々に母音と重なり合って残りの30%の呼吸量が母音に使われる。つまり英語音的kaは日本語音「カ」に比べ子音と母音とが分離されて発声されていると言える。この違いを認識し、発声の際具現化できるよう訓練する必要がある。



図5 日本語の子音母音イメージ



図6 英語の子音母音イメージ

III. カタカナ英語音からの脱却のための英語音声訓練（実践訓練編）

本稿における音声訓練の方法について、留意点を交えながら記述してみる。特に、日本語音と英語音の違いに留意することが肝要である。実際の訓練はグループで行い、自らの発声する音声とともにトレーナーや他の訓練生の発音も録音し、比較することが必要になる。このことにより、自らが発する音を客観的に捉えることができ、自ら音声の矯正ができる力をつけることができるのである。1回の訓練では十分な成果をあげることは期待できない。一定の期間この訓練を続けて行う必要がある。

しかしながら、訓練の概要を知ることで、志のあるものがグループを作って、お互いの力量をたかめる訓練が継続的に行われるのではないかと考える。

以下が実際の訓練の概要である。

(1) 呼吸法の訓練

メガフォン型口形と呼吸法をマスターする訓練を行う。口形を作るための筋肉の訓練、舌を強くするための訓練とともに音声を発声する準備段階である。

(2) アルファベット26文字の発音訓練

アルファベット26文字それぞれが持っている音(文字音)と文字名とを発声する訓練である。特に、文字音の内子音に注意して、発声を行う。その際、アタック音、呼吸法に留意して行う。文字名を発音する際に留意すべき点として、アタック音、子音と母音の分離、口形、呼吸法などがあげられる。

(3) アルファベット5連結の訓練

アルファベットの文字名を5つずつのグループ(abcde, fghij, klmno, pqrst, uvwxyz)にして、一息で発声する訓練である。この訓練では、無駄のない口形の移動、呼吸のコントロール、5つの文字名それぞれの頭にアタック音を入れることに留意しながら行う。また、一つの文字ごとに音階を下げていき、下降調のイントネーションを作るように行う。(図7参照)

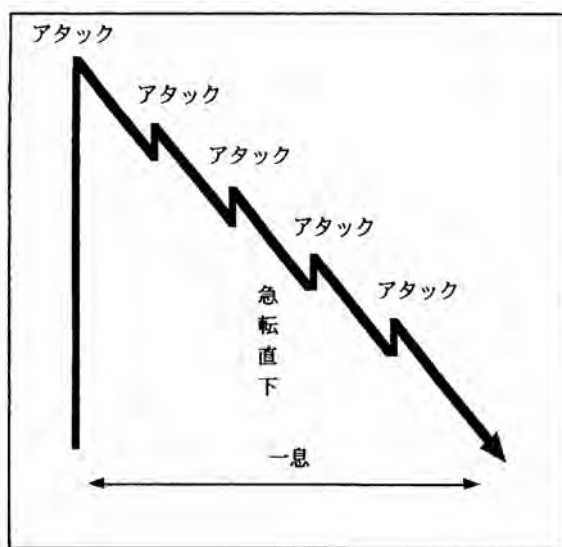


図7 5連結における「アタック」音

(4) 英語50音

日本語の50音を英語的に発声する訓練である。一部英語綴りもあるが概ね日本語の50音を基本にして、アルファベットで表記し、それを英語音声で発声する。(日本語50音の例外としては、la li lu le lo, tha thi thu the tho など)

（5）単語（単独）

日本語の中に日常的なカタカナ語となっているものを集め、その原音としての英語音を訓練する。カタカナ（日本語）音と英語音の違いを意識し、発声し分ける訓練である。語頭の子音の分量とアタック音に留意し、語尾の子音を消さないように注意する。例えば、/p/音で始まる単語の例をあげる。

park, pen, pig, pot（その他、Appendixの「単語表」参照）

（6）単語（4連結）

（5）で訓練した単語を4つ連結して発音する訓練である。4つの単語を一息で連続して発音することによって、4つの単語の語頭のアタック音をきちんと揃え、リズムをキープする訓練をする。語と語とを結びつけるとき、語尾の子音を消さないよう発音することに留意する。この訓練では、文章の発声への橋渡しとして考えられている。

（7）Nursery Rhyme

実際にNursery Rhymeを用いて英文の発声を行う。日常的な会話文ではなく、一定のリズムを持った詩を訓練に使うことによって、リズムキープの方法を習得する。それとともに、英文における強勢の入れ方を理解しマスターすることが目的である。基本的なイントネーションとしては、Nursery Rhyme独特の歌うような調子ではなく、なだらかな下降調で、リズムだけに留意した発声を訓練する。呼吸によって作り出す「短母音」と音の連結の訓練を行うのに効果的である。

次にあげるNursery Rhymeを訓練用に使用する。

Solomon Grundy/ Born on a Monday/ Christened on Tuesday/
Married on Wednesday/ Took ill on Thursday/ Worse on Friday/
Died on Saturday/ Buried on Sunday/ This is the end/ of Solomon Grundy

（8）口慣らし（早口言葉）

発声法、アタック音、口形の移動、子音と母音の分離などがうまく訓練できると、早口言葉なども発音しやすくなる。早口言葉の例を以下にあげておく。

例) Peter Piper picked a peck of pickled pepper.

IV. まとめ

本稿で紹介した訓練案は、本来は4～6ヶ月かけて行う入門期訓練のエッセンスである。本稿のもとになったワークショップでは、1回（90分）に凝縮して紹介している関係で、十分訓練に時間をかけられなかったのが残念である。しかしながら、小学校英語担当教員がこれを機会に定期

的に音声訓練し、自信を持って小学生に英語を教えられるようになって欲しい。

ただ、英語の音声訓練する場合、英語音を文化として捉える必要がある。音声を文化として捉えないために音声軽視の英語教育になるのではないか。外国語を習得する場合、異文化に敬意を払いながら付き合うことが、異文化をよりよく理解することにつながると考える。

本稿の内容は、英語音声獲得にのみ特化しているが、次の段階としては獲得した英語音声を駆使しながら、英語の音声表現を身につけていく段階に入る。英語の単語やフレーズまたは文章に「音」という魂を入れてこそ、意味を伝える言語になる。大人の場合は英語単語や文章を覚えるのと同時に音声習得の方がよいかもしれない。なぜならば英語の音声訓練の必要性は言葉としての表現力をつけることにほかならないからである。

本稿は、短く比較的簡単に、入門期の英語音声習得について述べた。実践しやすい内容になっているし、訓練内容そのものは単純である。いかに繰り返し練習して習得するかにかかっている。しかし、ただ苦行であるのなら挫折していくであろうが、絶えず「なぜ音声の訓練をするのか」を問い続けることによって、やり甲斐や動機付けができると考える。

音声そのものが人間の作り出す感情豊かな表現である。指導者自らが音声による表現の楽しさを知ることこそ、小学校英語活動の楽しさを伝えようとする根源ではないかと考える。外国語をマスターする楽しさと苦しさを、教員と小学生が共に経験しながら、共に成長する姿こそ21世紀の英語が使える日本人を育成する姿であろう。

参考文献

竹野茂 (1994) 「本学における『増幅法による英語音声訓練授業』について」『宮崎公立大学人文学部紀要』2:1, 41-52.

_____ (1995) 「本学における『増幅法による英語音声訓練授業』について — 2年目を迎えて—」『宮崎公立大学人文学部紀要』3:1, 31-44.

中津療子、竹野茂 (1994) 『宮崎公立大学SPEECHテキスト』.

Appendix

単語一覧表

p-	park	pen	pig	pot
b-	bat	bed	boy	book
m-	mother	make	milk	moon
f-	fire	fish	four	foot
v-	violin	vest	very	visit
s-	sun	seven	sit	school
z-	zebra	zipper	zone	zoo
t-	tiger	table	teeth	toe
d-	down	desk	dish	dog
n-	nurse	net	nail	no
l-	lion	leg	lily	leaf
r-	right	rabbit	rain	room
k-	kite	kill	key	keep
c-	come	cat	car	cold
g-	gate	girl	give	go
-ng	sing	king	swing	long
-x	ax	box	six	textbook
h-	hat	head	here	horse
w-	work	window	watch	woman
wh-	whale	whistle	what	wheat
qu-	quiet	question	queen	quarter
th-	thumb	thread	think	thick
th-	this	that	these	those
sh-	shell	she	ship	shop
ch-	child	church	chair	cheese
j-	just	Japan	jet	July
y-	young	yes	yacht	you

